

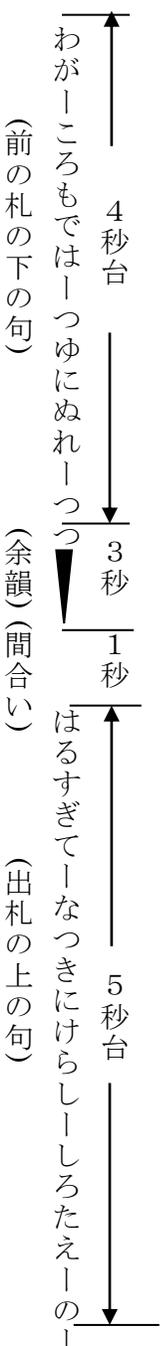
【読唱上の決まり】

(平成十三年六月二十日)

競技かるたの読み方は、文法を重視しながらも、競技者の取りやすいタイミングをはかるため、独特の読み方をする。

- 1、上の句の五文字は切らないで読む。
- 2、大山札は二句目までを一気に読む。(但し二句目の単語の切れ目でわずかに切るのは良い)
- 3、上の句の終わりは文法的におかしくなければ最後の一字の前で少し伸ばして読む。
(但し二字でないと意味をなさぬ単語及び「山」「川」「草」「入る」は二字でまとめる)
- 4、下の句の長い単語(名詞、動詞、形容詞)は一語としてまとめて読む。
(但し急いで読まない)
- 5、下の句の終わりは、選手のタイミングに合わせるため、文法に関係なく最後の二字の前を少し伸ばして読む。
(但し「もがな」「おもへ」「おもふ」「なくに」「ものを」は三字でまとめる)
- 6、読唱の基本パターンは「4・3・1・5方式」である。
(下の句4秒台、余韻3秒、間合い1秒、上の句5秒台の速度で読む)

(読唱の例)



【競技かるたの読み方一覧】

『序 歌』

難波津に―咲くやこの花―ふゆごも―り―

いまを―春べと―咲くやこの―花―

『あ』の部

78 淡路島―かよふ千鳥の―鳴く声―に―

幾夜―ねざめぬ―須磨の関―守―

45 あはれとも―いふべき人は―思ほえ―で―

身の―いたづらに―なりぬべき―かな―

69 あらし吹く―三室の山―もみぢ葉―は―

竜田の―川の―錦なり―けり―

56 あらざらむ―この世のほかの―思ひ出―に―

今―ひとたびの―あふこと―もがな―

1 秋の田の―かりほの庵の―苫をあら―み―

わが―衣手は―露にぬれ―つつ―

79 秋風に―たなびく雲の―たえ間―より―

もれ出づる―月の―影のさや―けさ―

12 天津風―雲のかよひ路―吹きとぢ―よ―

をとめの―姿―しばしとど―めむ―

7 天の原―ふりさけ見れば―春日―なる―

三笠の―山に―出でし月―かも―

30 有明の―つれなく見えし―別れ―より―

あかつき―ばかり―憂きものは―なし―

58 ありま山―みなの笹原―風吹け―ば―

いで―そよ―ひとを―忘れやは―する―

31 朝ぼらけ有明の月と―見るまで―に―

吉野の―里に―降れる白―雪―

64 朝ぼらけ宇治の川霧―絶え絶え―に―

あらはれ―わたる―瀬々のあじ―ろ木―

39 浅茅生の―小野の篠原―しのぶれ―ど―

あまりて―などか―人の恋―しき―

3 あしびきの―山鳥の尾の―しだり尾―の―

ながながし―夜を―ひとりかも―寝む―

43 あひみての―後の心に―くらぶれ―ば―

昔は―物を―思はざり―けり―

52 明けぬれば―暮るるものとは―知りなが―ら―

なほ―恨めしき―朝ぼらけ―かな―

『な』の部

25 なにしおはば―逢坂山の―さねかづ―ら―

人に―知られで―くるよし―もがな―

19 難波潟―短き芦の―ふしの間―も―

逢はで―この世を―過ぐしてよ―とや―

88 難波江の―芦のかりねの―ひとよ―ゆゑ―

みをつくしてや―恋ひわたる―べき―

36 夏の夜は―まだ宵ながら―明けぬる―を―

雲の―いづこに―月宿る―らむ―

53 嘆きつつーひとりぬる夜のー明くるまーはー^{なげ}
86 嘆けとてー月やは物をー思はーするー^{なげ}
80 長からむー心もしらずー黒髪ーのー^{なが}
84 ながらへばーまたこのごろやーしのばれーむー^え

いかにー久しきーものとかはーしる^{ひさ}
かこち顔ーなるーわが涙ーかな^{がお}
みだれてー今朝はー物をこそー思へ^{けさわ}
憂しとー見し世ぞー今は恋ーしき^う

『お』の部

60 大江山ーいく野の道のー遠けれーばー^{お(お)えやま}
95 おほけなくーうき世の民にーおほふーかなー^{お(お)}
44 逢ふことのーたえてしーなくばーなかなかーにー^{お(お)}
5 奥山にーもみぢふみわけー鳴く鹿ーのー^{おくやま}
82 思ひわびーさても命はーあるものーをー^{おもい}
72 音にきくーたかしの浜のーあだ波ーはー^{おと}
26 小倉山ー峰のもみぢ葉ー心あらーばー^{おぐらやま}

まだーふみも見ずー天の橋ー立^{あま}
わがたつーそまにー^{そま}
わがー立つ杣にー墨染のー袖^{そま}
人をもー身をもー恨みざらーまし^{ひと}
こえきくーときぞ^{こえ}
声ー聞くとときぞー秋は悲ーしき^{あき}
憂きにーたへぬはー涙なりーけり^う
かけじやー袖のーぬれもこそーすれ^{そで}
いまひとたびのーみゆき待たーなむ^{いま}

『わ』の部

8 わが庵はー都のたつみーしかぞーすむー^{いおわ}
92 わが袖はー潮干にみえぬー沖の石ーのー^{そでわ}
38 忘らるるー身をば思はずーちかひてーしー^{わす}
54 忘れじのーゆくすゑまではーかたけれーばー^{わす}
20 わびぬればーいまはたおなじー難波ーなるー^わ
11 わたの原八十島かけてー漕ぎ出でぬーとー^{わたの}
76 わたの原漕ぎ出でて見ればー久方ーのー^{わたの}

世をーうぢ山とー人はいふーなり^よ
人こそーしらねーかわくまもーなし^{ひと}
人のー命のー惜しくもあるーかな^{ひと}
けふをーかぎりのーいのちとーもがな^{きよ}
みをつくしてもーあはむとぞー思ふ^み
人にはー告げよーあまのつりー舟^{ひと}
雲るにーまがふー沖つ白ー波^{くもい}

『た』の部

73 高砂のー尾上の桜ー咲きにーけりー^{たかさご}
4 田子の浦にーうち出でて見ればー白妙ーのー^{たご}
16 たち別れーいなばの山のー峰に生ふーるー^{わか}
89 玉のをよーたえなばたえねーながらへーばー^{たま}

外山のー霞ーたたずもあらーなむ^{とやま}
富士のー高嶺にー雪はふりーつつ^{ふじ}
まつとしー聞かばーいま帰りーこむ^{まつ}
忍ぶるーことのー弱りもぞーする^{しの}

55 滝の音は―たえて久しく―なりぬれ―ど
たき おとわ ひさ
34 誰をかも―知る人にせむ―高砂―の―
たれ しひと たかさ

名こそ―流れて―なほ聞こえ―けれ
なが おき
まつ 昔の―友なら―なくに
むかし とも

『こ』の部

29 心あてに―折らばや折らむ―初霜―の―
こころ お おん はつしも
68 心にも―あらでうき世に―ながらへ―ば―
こころ わかれ てわ
10 これやこの―行くも帰るも―別れて―は―
ゆ かえ わか わ
24 このたびは―ぬさもとりあへず―手向―山―
こ ひと ゆー やま
97 来ぬ人を―まつほの浦の―夕なぎ―に―
こい ちよー た
41 恋すてふ―わが名はまだき―立ちに―けり―
こい ちよー た

おきまどはせる―白菊の―花
おき まど わせ りくく はな
恋しかる―べき―夜半の月―かな
こい よわ つき
知るも―知らぬも―逢坂の―関
し し おーさか せき
もみぢの―にしき―神のまに―まに
じ かみ
焼くや―もしほの―身もこがれ―つつ
や お み
人―しれずこそ―思ひそめ―しか
ひと しれず こそ おもい

『み』の部

49 みかきもり―衛士のたく火の―夜は―もえ―
えじ ひ よるわ
27 みかの原―わきて流るる―いづみ―川―
はら なが ず がわ
14 みちのくの―しのぶもぢずり―誰ゆゑ―に―
じ たれ え
94 み吉野の―山の秋風―さ夜ふけ―て―
よしの やま あきかせ よ
90 見せばやな―雄島のあまの―袖だに―も―
み おじま そで

昼は―消えつつ―物をこそ―思へ
ひるわ き もの おもえ
いつ見き―とてか―恋しかる―らむ
み みて か こい ん
乱れそめ―にし―われなら―なくに
みだれ そめ に し
ふるさと―寒く―衣うつ―なり
さむ ころも
ぬれにぞ―ぬれし―色はかは―らず
いろわ わ

『は』の部

96 花さそふ―嵐の庭の―雪なら―で―
はな ー あらし にわ ゆき
9 花の色は―うつりにけりない―たづら―に―
はな いろわ ず
2 春過ぎて―夏来にけらし―白妙―の―
はるす なつき しろたえ
67 春の夜の―ゆめばかりなる―手枕―に―
はる よ たまくら

ふりゆく―ものは―わが身なり―けり
わ は み
わが身―よにふる―ながめせし―まに
み
衣―ほすてふ―天の香具―山
ころも ちよー あま かぐ やま
かひなく―たたむ―名こそをし―けれ
い たむ な お

『や』の部

32 山川に―風のかけたる―しがらみ―は―
やまがわ かぜ
28 山里は―冬ぞさびしき―まさり―ける―
やまさとわ ふゆ
59 やすらは―で―寝なましものを―さ夜ふけ―て―
わ ね よ
47 八重葎―しげれる宿の―さびしき―に―
や えむぐら やど

流れも―あへぬ―もみぢなり―けり
なが あ え じ
人めも―草も―かれぬと思―へば
ひと くさ おも え
かたぶく―までの―月をみし―かな
つぎ
人こそ―見えね―秋は来に―けり
ひと み あきわき

『よ』の部

93 世の中は―つねに―もがもな―なぎさ―漕ぐ―
 83 世の中よ―道こそなけれ―思ひ―入る―
 85 夜もすがら―物思ふころは―明けやら―で―
 62 夜をこめて―鳥のそらねは―はかる―とも―

『か』の部

98 風そよぐ―ならの小川の―夕ぐれ―は―
 48 風をいたみ―岩うつ波の―おのれ―のみ―
 51 かくとだに―えやはいぶきの―さしも―草―
 6 かささぎの―渡せる橋に―おく霜―の―

『い』の部

21 いま来むと―いひしばかりに―長月―の―
 63 いまはただ―思ひ絶えなむと―ばかり―を―
 61 いにしへの―奈良の都の―八重さく―ら―

『ち』の部

75 契りおきし―させもが露を―いのち―にて―
 42 契りきな―かたみに袖を―しぼり―つつ―
 17 ちはやぶる―神代もきかず―竜田―川―

『ひ』の部

35 人はいさ―心もしらず―ふるさと―は―
 99 人もをし―人もうらめし―あぢきな―く―
 33 ひさかたの―光のどけき―春の日―に―

『き』の部

15 君がため春の野にいでて―若菜―つむ―
 50 君がため惜しからざりし―命―さへ―

あまの―小舟の―綱手かな―しも

山の―奥にも―鹿ぞ鳴く―なる

聞の―ひまさへ―つれなかり―けり

よに―逢坂の―関はゆる―さじ

みそぎぞ―夏の―しるしなり―ける

くだけて―物を―思ふころ―かな

さしも―しらじな―もゆる思―ひを

白きを―見れば―夜ぞふけに―ける

ありあけの―月を―待ち出でつる―かな

人づて―ならで―言ふよし―もがな

けふ―九重に―にほひぬる―かな

あはれ―今年の―秋もいぬ―めり

末の松山―波こさじ―とは

からくれなゐに―水くくる―とは

花ぞ―昔の―香ににほひ―ける

世を―思ふゆゑに―物思ふ―身は

しづ心―なく―花の散る―らむ

わが―衣手に―雪は降り―つつ

長く―もがなと―思ひける―かな

91 きりぎりすー鳴くや霜夜のーさむしろーにー

衣ーかたしきーひとりかもー寝む

『う』の部

74 憂かりけるー人を初瀬のー山おろーしー

はげしかれーとはー祈らぬーものを

65 恨みわびーほさぬ袖だにーあるものーをー

恋にー朽ちなむー名こそ惜しーけれ

『つ』の部

23 月見ればーちぢに物こそー悲しけーれー

わが身ーひとつのー秋にはあらーねど

13 つくばねのー峰よりおつるーみなな のー川ー

こひぞーつもりてー淵となりーぬる

『し』の部

40 しのぶれどー色に出でにけりーわが恋ーはー

物やー思ふとー人のとふーまで

37 白露にー風の吹きしくー秋の野ーはー

つらぬきとめぬー玉ぞ散りーける

『も』の部

100 ももしきやー古き軒端のーしのぶにーもー

なほーあまりあるー昔なりーけり

66 もろともにーあはれと思へー山ざくーらー

花よりーほかにーしる人もーなし

『ゆ』の部

71 夕さればー門田の稲葉ーおとづれーてー

芦のーまるやにー秋風ぞー吹く

46 由良のとをーわたる舟人ーかぢをーたえー

ゆくへもーしらぬー恋の道ーかな

『む・す・め・ふ・さ・ほ・せ』の部

87 村雨のー露もまだ干ぬーまきの葉ーにー

霧ーたちのぼるー秋の夕ーぐれ

18 すみの江のー岸に寄る波ーよるさへーやー

夢のーかよひ路ー人目避くーらむ

57 めぐりあひてー見しやそれともわかぬまーにー

雲がくれーにしー夜半の月ーかな

22 吹くからにー秋の草木のーしをるれーばー

むべー山風をー嵐といふーらむ

70 さびしさにー宿をたち出でてーながむれーばー

いづこもーおなじー秋の夕ーぐれ

81 ほととぎすー鳴きつる方をーながむれーばー

ただーありあけのー月ぞ残ーれる

77 瀬をはやみー岩にせかるるー滝川ーのー

われてもー末にーあはむとぞー思ふ